



夏目漱石『心』英訳で読む「下 先生と遺書」： Meredith Mckinney訳の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): 夏目漱石, 『心』, 「下 先生と遺書」, 英訳, メレディス・マッキニー キーワード (En): 作成者: 徳永, 光展 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008871

夏目漱石『心』英訳で読む「下 先生と遺書」

—Meredith McKinney 訳の分析—

徳永光展

Reading the English translation of ‘Part III: Sensei’s Testament’ of *Kokoro* by Sôseki Natsume: Analysis of the translation by Meredith McKinney

Mitsuhiro TOKUNAGA

要旨：本稿は 2010 年に発表されたメレディス・マッキニーによる夏目漱石『心』英訳の中から「下 先生と遺書」の箇所を取り上げ、日本語原文と英訳との対照研究を行ったものである。英文としては自然な仕上がりを見せてはいても、日本語原文のニュアンスからは少々離れた表現になっているのではないかと考えられる点に着目した。(1)問題点はどうしても旨く訳せない日本語表現が英訳中に残存している状況にあり、(2)その拠り所となる根拠は再翻訳 < backtranslation > を試みた場合、原文のニュアンスからは相当離れた表現が散見されることにあり、(3)再翻訳を通して明らかとなったのは日本独特の文化的背景に根差した語彙や同時代の読者のみに共有されていた表現は翻訳に適さないという問題が残ることであり、(4)今後の展望としては、読者が翻訳され切れていない表現につき、どのように理解を深めればよいのかという作品享受の在り方が考究されなければならない事実が明らかになった。

キーワード：夏目漱石、『心』、「下 先生と遺書」、英訳、メレディス・マッキニー

1. 緒言

本稿で考察する英訳は、2010 年にニューヨークに本社を構えるペンギン・クラシックスから出版された。英訳としては、1941 年に日本で佐藤（後の近藤）いね子、1957 年にアメリカでエドウィン・マックレランが翻訳したものに続く第 3 の最新版となる。

メレディス・マッキニーはオーストラリア在住。1950 年生まれ。オーストラリア国立

大学に学び、学士・修士・博士、すべての学位を同大学にて取得している。文部省の国費留学生として、京都大学文学部に留学。その後、神戸市外国語大学にて外国人教師を務めた。帰国後は、オーストラリア国立大学の研究員として教育研究に従事している。夏目漱石の作品では、他に同じくペンギン・クラシックスから出版された『草枕』の翻訳がある。

近藤いね子やエドウィン・マックレランの翻訳については既に先行研究が巻末に掲げたように存在するが、メレディス・マッキニー訳に対する評価は始まったばかりである。筆者は数次にわたって、この翻訳を検討してきたが、今回は「下 先生と遺書」に関する分析結果を報告するものとする。

2. 英訳誕生の背景

近藤訳が 1941 年、マックレラン訳が 1957 年に出版され、対するマッキニー訳は 2010 年に出版されている事実に思いを馳せた時、翻訳は時代やその翻訳者が生きた社会の影響を多分に受けるということにも気付かされるに違いなかろう。近藤訳は太平洋戦争勃発の最中に北星堂より刊行されている。日本の国威発揚のために、日本文化を海外に輸出する必要に迫られていた時期とその出版が重なっているのである。また、マックレランの翻訳は 1957 年に初版がアメリカで出版されたが、その時期は第二次世界大戦の余波が一段落つき、日本における高度成長が始まろうとしていた時期に相当する。また、日本が国際社会に復帰しつつあった年代とも符合する。そのような時に、日本ではベストセラーであり続けた本作品がアメリカ人の手によって世界に紹介された訳である。この翻訳は半世紀以上にわたって、世界中で多くの読者を獲得し、魅了してきたが、社会の変化が急速に進む現代の感覚からすれば、馴染みの薄い表現として感じられる点が存在する可能性も指摘しておかなければなるまい。一例のみ挙げればマックレランの訳では「殉死」(109 章 / 下 55) はそのまま Junshi とされ、註による説明がなされているが、マッキニーは “to die with your lord.”(231) <君主と共に死ぬ> といった形で訳しきられているのである。

マッキニーの発言によれば、この翻訳は、出版社からの依頼によるものであったとのことである<筆者のインタビューによる / 2015 年 6 月 28 日、於・オーストラリア国立大学>。とするならば、新たな『心』英訳を市場が求めているという動きに対する敏感な反応が出版界を取り巻く外的要因として存在したという英米圏の社会事情にも注目しておく必要があるに違いない。

3. 分析の手順

下 は先生が「私」に宛てた遺書の全文である。そこには、漱石独特の表現のみならず、大正初期の日本語としては自然であっても、現代の感覚からすれば、やや古めかしさを感じる表現も含まれている。また、現代における日本人読者の立場からみて、少々

馴染みのない言い回しもある。このような先生の独特な語りはマッキニー訳では一体どのように翻訳されているのか。このような関心に基つき、本論文では、遺書の執筆順に沿って日英間で異なった表現となっている箇所を洗い出し、それぞれの翻訳が抱え持つ特徴を明らかにする。

その際には、日本語原文、英訳を共に示し、必要に応じて、訳文を日本語に再翻訳することで、訳文が原文からどれだけの隔たりを持っているかを議論しようとするものである。

4. 分析

4.1. 先生による遺書執筆

先生は遺書の冒頭、「私は返事を上げなければ済まない貴方に対して、言訳のために斯んな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと不躰な言葉を弄するのではありません。」(55章/下1)と述べている。就職斡旋を頼む「私」からの手紙に対する返事を怠ったことに対する罪悪感が責任感の強い先生の性格を彷彿とさせる記述である。この箇所に対応する英訳は、I confess this to you now by way of explanation for my unforgivable failure to respond. I am not being intentionally rude to stir your anger. (121)となっているのだが、explanation<説明>に対する原文は「言訳」の箇所ではないだろうか。原文では「言訳」なのであるが、英訳を再翻訳すると、<手紙を出さなかったことを許してもらうための説明>という表現になっている。また「斯んな事」に対応するのがthisだが、英語では何の色合いも宿っていないのに、原文では詰らない言い訳をして、といった指示内容を彷彿させる。先生は普段、筆を持ちつけない生活を送っていた。だから、そんなに簡単には執筆という作業に没入できないのであり、そういった自己への自嘲も込められた言い方が「斯んな事」という指示内容を見下したかのような表現を生んでいると解釈できるのである。

4.2. 父の病状

「私」の父は郷里で病の床に伏していた。先生は「私」が大学の卒業式を終えた夜、その病に言及し、用心しなければならないと述べていた。「私」が先生から上京できるかという内容の電報に対して、父の病状が思わしくないから出られないとの返電を打った後、長文の手紙で具体的状況を説明したことに対して、先生は失望を感じつつも当然だという反応を示していた。その時の心の動きを先生は回想して述べる。

其癖あなたが東京にある頃には、難症だからよく注意しなくつては不可いと、あれ程忠告したのは私ですのに。私は斯ういふ矛盾な人間なのです。或は私の脳髓よりも、私の過去が私を圧迫する結果斯んな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私は此点に於ても充分私の我を認めてゐます。あなたに許して貰はなくてはなりません。(55章/下1)

一方、この箇所の英訳は以下のようにになっている。

This despite the fact that I was the one who so earnestly advised you to take good care of him and emphasized how dangerous his illness was. I am an inconsistent creature. Perhaps it is the pressure of my past, and not my own perverse mind, that has made me into this contradictory being. I am all too well aware of this fault in myself. You must forgive me. (122)

「あなたが東京にゐる頃」に相当する英訳がここには見当たらない。「東京」という単語が消失していることは一目瞭然である。しかしながら、この箇所は、先生と「私」がやり取りをしていたのは東京という場所においてであることは言うまでもないので、敢えて訳出しなくてもよいという判断が働いているはずなのである。また、「私は此点に於ても充分私の我を認めてゐます。」の「我」であるが、対応する英訳は fault<非>となっている。これも文章の流れを汲み取った翻訳である。先生は自らの性格について、「或は私の脳髓よりも、私の過去が私を圧迫する結果斯んな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません」(55 章 / 下 1) と分析しているが、その箇所は Perhaps it is the pressure of my past, and not my own perverse mind, that has made me into this contradictory being. (122) と訳出されている。「圧迫」が the pressure、「斯んな矛盾な人間」は this contradictory being である。

4.3. 執筆への義務感

先生は、これから書き綴る物語が自らの秘められた負の経験である事実を匂わせながら言う。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。然し恐れては不可せん。暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい。私の暗いといふのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。其倫理上の考は、今の若い人と大分違つた所があるかも知れません。然し何う間違つても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。(56 章 / 下 2)

この箇所には「倫理」という語が 4 度も登場し、先生が如何に誠実に生きようとしたかが如実にうかがわれる内容となっている。英訳では moral が 2 度現われるが、morality という語も 1 度使用され、以下のようにになっている。

I will not hesitate to cast upon you the shadow thrown by the darkness of human life. But do not be afraid. Gaze steadfastly into this darkness, and find there the things that will be of use to you. The darkness of which I speak is a moral darkness. I was born a moral man and raised as one. My morality is probably very different from that of young people today. But different though it may be, it is my own. It is not some rented clothing I have borrowed to suit the moment. (124)

漱石は、たたみかけるようにして、同じ単語を繰り返し使用するが、直訳では英語圏の読者に煩わしく映りかねない。よって、強調表現としての繰り返しをどのように処理するかは、訳者にとっては腕の見せ所となる。

4.4. 先生の過去

先生は、少年時代を回想して「たゞ斯ういふ風に物を解きほどいて見たり、又ぐる／＼廻して眺めたりする癖は、もう其時分から、私にはちゃんと備わつてみたのです。」(57章/下3)と述べるが、この点については、The fact is that I had already developed the habit of taking nothing at face value but analyzing and turning things over obsessively in my mind. (126)という具合に訳されている。「ぐる／＼」というオノマトペはいかんともしがたいが、turning things が対応しているのである。

先生は、叔父に裏切られ、財産を横領される体験がその後の人生にも痛切な影響を与え、性格の変化まで来たと回想する。その様子は、「此性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後來益他の徳義心を疑ふやうになつたのだらうと思ふのです。」(57章/下3)といった形で意味づけられるが、この箇所に対応する英訳は For I feel my impulse to doubt the honorable nature of others' actions and behavior probably grew from this time. (126)となっている。「徳義心」とは抽象的な概念であるが、英訳では the honorable nature が対応している。

財産を誤魔化したという叔父と父は、先生の目には全く異なって映った。「父は先祖から譲られた遺産を大事に守つて行く篤実一方の男でした。」(58章/下4)というのが先生の下した父への評価であるが、英訳では My father was a true gentleman and managed his inheritance with great diligence. (128)とあって、「篤実一方」には a true gentleman < 真の意味での紳士 > という訳が添えられている。

このような父の下で育ったのが先生であった。新潟の実家を処分し、二度と故郷へは帰らないとの壮絶な決意で、東京に留まる決意をした直後に住居に関する心境の変化が生じてくる。

金に不自由のない私は、騒々しい下宿を出て、新らしく一戸を構へて見やうかといふ気になつたのです。然しそれには世帯道具を買ふ面倒もありますし、世話をして呉れる婆さんの必要も起りますし、其婆さんが又正直でなければ困るし、宅を留守にしても大丈夫なものでなければ心配だし、と云つた訳で、ちよくら一寸実行する事は覺束なく見えたのです。(64章/下10)

この箇所の英訳を以下に掲げてみよう。

With my new financial freedom, I began to play with the idea of quitting my noisy boardinghouse and finding myself a house to live in. I soon realized, however, that this would entail the bother of buying the necessary furniture, and employing a servant to run the household, one who was honest, so that I could leave the house unattended without worrying. One way or another, I could see that it would be no easy matter to achieve my plan.(139)

「所帯道具」は the necessary furniture < 必要な家具 >、「世話をして呉れる婆さんの必要も起りますし」は、employing a servant to run the household < 家庭を管理する召使を雇う >、また、「ちよくら一寸実行する事は覚束なく見えたのです」は、One way or another, I could see that it would be no easy matter to achieve my plan. であって、「覚束なく」には no easy matter < 簡単なことではない > が対応している。

4.5. 新居探し

先生は、結局家を探してみる気分になり、あちらこちらを動き回ることになった。「私は露次を抜けたり、横丁を曲つたり、ぐる／＼歩き廻りました。仕舞に駄菓子屋の上さんに、こゝいらに小じんまりした貸家はないかと尋ねて見ました。」(64章/下10)と原文では続くのだが、第1文目は要するに狭い道を歩き回ったという意味合いで理解すればよい箇所であって、I wandered around, ducking down lanes and into side alleys. (139)となっている。続く第2文目の英訳は Finally I asked a cakeseller if she knew of any little house for rent in the area.(139)で、「駄菓子屋の婆さん」は a cakeseller < ケーキ屋 > という訳語が当てられている。漱石がイメージしていたのが和菓子屋だったことは言うまでもないが、英語圏の読者にその詳細を伝えようとすると、膨大な注が必要となろう。英米圏の人々にとってのお茶菓子が一般的にはケーキであることに合わせてこのような訳語が選択されたと解釈できる箇所である。

駄菓子屋の上さんも様々に考えてくれた。その結果、「上さんは「左右ですね」と云つて、少時首をかしげてゐましたが、「かし家はちよいと……」と全く思い当たらない風でした。私は望のないものと諦めて帰り掛けました。すると上さんが又、「素人下宿ぢや不可ませんか」と聞くのです。」(64章/下10)という展開に及ぶ。その英訳は、“Hmm,” she said, and cocked her head for a moment or two. “I can’t think of anything offhand...” Seeing that she apparently had nothing to suggest. I gave up hope and was just turning for home when she asked. “Would you lodge with a family?”(139)であって、「素人下宿」は lodge with a family < ある家族と住む > とされている。明治時代の日本人が聞けばすぐ理解できるこの単語も英米圏では1対1対応する名詞が存在せず、文にしなければ意味をなさないことがうかがわれる箇所である。

先生は、紹介された家に移ることにする。そこは、奥さんと御嬢さんの二人住まいであった。

私は早速其家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。其所は宅中で一番好い室でした。本郷辺に高等下宿といった風の家がぼつ／＼建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間の様子を心得てゐました。私の新らしく主人となつた室は、それ等よりもずっと立派でした。」(65章/下11)

このように先生が述べている箇所、英訳は以下のようにまとめられている。

I moved in immediately and was given the room where our initial interview had taken place. It was the best room in the house. At that time a few better-quality student boardinghouses were springing up in the Hongô area, and I had a fair idea of the top of the range in student accommodation. The room I was now master of was far finer than anything else available. (141)

「高等下宿」とは当時流行した単語だが、現代日本語ではもはや死語と化していると言っても過言ではない。この言葉に相当する英訳は、better-quality student boardinghouses < 学生が住む上等の下宿 > であるが、こうでも表現するしかない箇所である。

4.6. 新居の匂い

そのように学生としては贅沢過ぎる環境を先生は手にした。しかしながら、そこには先生の趣味とは明らかに異なった空気も同時に感じ取れた。その様子を先生は思い出している。

私は移った日に、其室の床に活けられた花と、其横に立て懸けられた琴を見ました。何方も私の気に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちから有つてゐました。その為でもありませうが、斯ういふ艶めかしい装飾を何時の間にか軽蔑する癖が付いてゐたのです。(65章/下11)

対する英訳は *koto* に注釈が添えられた上で、以下のようにまとめられる。

On the day I arrived, I noted the flowers arranged in the alcove, and a *koto* propped beside them. I did not care for either. I had been brought up by a father who appreciated the Chinese style of poetry, calligraphy, and tea-making, and since childhood my own tastes had also tended toward the Chinese. Perhaps for this reason I despised this sort of merely charming decorativeness. (141)

ここで触れておきたいのは、Chinese という単語の挿入についてである。この単語は「詩」、「書」、「煎茶」全体を修飾している。「唐めいた趣味」の箇所は、< 子供時代より私自身の趣味は中国的なものに向かう > と訳すべき英文が対応している。tastes に形容詞を前置させていく日本語の方法とは異なり、この語を主語として文を作る形式が英訳では採用されている。ここで引用した最後の英文は、< おそらくはこういう理由で、私はこの種類の単純に美しいだけの人を魅了しようとする装飾については軽蔑しました。 > という意味になる。this reason は直前の1文全体を指している。「唐めいた趣味」という原文の翻訳は前文を受けて、this sort of merely charming decorativeness という指示語を含んだ説明調で訳されるほかなかったのである。

先生は、女性的な匂いが充満する装飾を軽んじる態度を成長過程で父親から知らず知らずのうちに身に付けさせられてきた。そのようにして培われた先生の美意識からすれば、学生として最高級の住まいを持ったとしても、女性だけの家の雰囲気には違和感も覚えずにはいられなかったと見なければなるまい。先生は自らが持ってきた唐めいた道

具類が新居では必ずしも似つかわしくない様子に気付き始める。

私の父が存生中にあつめた道具類は、例の叔父のために滅茶々にされてしまつたのですが、夫でも多少は残つてゐました。私は国を立つ時それを中学の旧友に預かつて貰ひました。それから其中で面白さうなものを四五幅裸にして行李の底へ入れて来ました。私は移るや否や、それを取り出して床へ懸けて楽しむ積でゐたのです。所が今いつた琴と活花を見たので、急に勇気がなくなつて仕舞ひました。後から聞いて始めて此花が私に対する御馳走に活けられたのだといふ事を知つた時、私は心のうちで苦笑しました。」(65章/下11)

この部分の英訳は以下の通りである。

My uncle had squandered the collection of objects that my father had accumulated during his lifetime, but some at least had survived. Before I left home, I had asked my school friend to care for most of them and carried four or five of the best scrolls away with me in my trunk. I intended to take them out as soon as I arrived and hang one in the alcove to enjoy it. But when I saw the flower arrangement and the *koto*, I lost my courage. Later I learned that these flowers had been put there especially to welcome me, and I smiled drily to myself. (141-142)

「面白さうなものを四五幅」とあるが、これは four or five of the best scrolls <最もよい4つか5つの掛け軸>として処理されている。興味深く感じられるのは、「此花が私に対する御馳走に活けられたのだ」という箇所が these flowers had been put there especially to welcome me と訳されている点である。再翻訳すると、<この花が私を特別に歓迎するために置かれた>となり、原文にある「御馳走」という独特の比喩表現が訳文では影を潜めているのである。ここは、どうしても普通の表現で訳さなければ、英語として意味をなさないと云わざるを得ない。

自らの趣味からは遠く隔たった花や音楽について、「私は喜んで此下手な活花を眺めては、まづさうな琴の音に耳を傾むけました。」(65章/下11)と述懐する先生は、当時の様子を次のように述べている。

それでも臆面なく色々の花が私の床を飾つて呉れました。尤も活方は何時見ても同じ事でした。それから花瓶もついぞ変つた例がありませんでした。然し片方の音楽になると花よりももつと変でした。ぼつん／＼糸を鳴らす丈で、一向肉声を聞かせないのです。(65章/下11)

対する英訳は、以下のようなものである。

Yet day after day flowers were unashamedly arrayed in my alcove, although the arrangement always took the same form, and the receptacle never changed. As for the music, it was odder than the flowers. She simply plucked dully away at the instrument. I never heard her really sing the accompanying songs. (142)

音楽に関する記述を日英対照させると興味深い。まず、「ぼつん／＼糸を鳴らす丈で」という音の形容が英訳では<楽器の弦をのろく弾く>となり、「ぼつん／＼」

という音声の形容語が消失している。続いて、「一向肉声を聞かせないのです」は、
＜私は御嬢さんが演奏に合わせて歌っているのを聞いたことがないのです＞という
ように説明的な文に仕上がっているのである。弦楽器をピツィカートのように弾く
奏法は、ヴァイオリンをはじめとするオーケストラの各弦楽器パートに見られるが、
そのようなイメージを持つ英米圏の読者に琴がイメージできるかどうかも問題とな
るところである。御嬢さんは歌も楽器も教養として嗜んではいるが、御世辞にもうま
いとはいえないという点に読者の理解が進めばよいのであるとすれば、訳文は効果を
上げていると評価できよう。

4.7. 御嬢さんへの疑念

御嬢さんの家に移り住んだ先生は、この一家を信用すれば救いを得られたかもしれな
い。しかしながら、奥さん、御嬢さんに対しても、自らの財産に目を付けているのでは
ないかとの疑念から自由になれず、「時々は彼等に対して気の毒だと思ふ程、私は油断の
ない注意を彼等の上に注いでゐたのです。おれは物を偷まない巾着切見たやうなものだ、
私は斯う考へて、自分が厭になる事さへあつたのです。(66 章 / 下 12) Sometimes my keen
awareness of them was so interest it shamed me to think of it. All that distinguished me from a
thief was that I was stealing nothing, I thought in self-disgust. (144) という絶望的な回想が執
筆時にはなされているのである。

self-disgust とは、＜自己嫌悪＞と訳すべき単語である。物こそ盗まないが、自己嫌悪
に陥っている、というあたりが英訳の意図するところであり、「巾着切見たやうなものだ」
という表現は、穏便な比喻を抜いた形で訳出されているのである。

それでも、日を経るにつれて、生活は安定し、先生は奥さんや御嬢さんとも気心が知
れるようになってくる。そのような変化が実感されるようになった頃、「私が書物ばかり
買ふのを見て、奥さんは少し着物を拵えろと云ひました。私は実際田舎で織つた木綿も
のしか有つてゐなかつたのです。其頃の学生は絹の入つた着物を肌に着けませんでした。」
(71 章 / 下 17) といったようなやり取りが先生と奥さんとの間でなされる。この箇所、
英訳は I spent my money on nothing but books. Okusan told me I should get some clothes, and
it was true, all I had were the country-woven cotton robes that had been made for me back home.
Students in those days never wore anything with silk in it. (154) となっているが、「着物」は
some clothes、「木綿もの」は cotton robes、「絹の入つた着物」は anything with silk in it
となっている。いずれも洋装を想像することも可能な形で翻訳されているのは興味深い
ところである。確かに、日本の明治時代における服装の描写について、正確さを追求し
た翻訳を目指せば目指すほど、かえってぎこちなく不明瞭な表現にしかない可能性
はある。よって、ここでは先生が服装に関しては無関心だったという事実が読者に伝わ
れば、翻訳者としては十分に役目を果たしたと見ることもできよう。それ以上の負荷を
翻訳者にかけていけば、翻訳それ自体が説明調で不自然なものになってしまう危険が生

じるであろう。

面白いことに「着物」というここで使用された言葉は後に「衣服」という言葉となって、原文中に再び現われる。「私は何うせ要らないものを買ふなら、書物でも衣服でも同じだといふ事に気が付きました。」(71章/下17)という箇所なのであるが、対する英訳は、Books or clothing, I realized then—it made no difference if the thing went unused. (154)となっており、「衣服」も clothing、つまりは「着物」と同様の訳語が選ばれているのである。

4.8. K の存在

その後、先生は親友であった K が夜学校の教師をしながら苦学する様子に接し、「彼は段々感傷的になつて来たのです。」(76章/下22)と振り返るが、この部分は He grew overly emotional. (165)と訳され、「感傷的」に対応する単語が emotional となっている。emotional には通常、＜感情的＞という日本語訳が当てられる。「感傷的」とまで述べると踏み込んだ解釈とも見なし得るが、感情を制御し難くなった状態に陥ったと考えれば許容できる。K がなぜそのような境遇に陥ったかと言えば、医学を修めるべく養家から学費、生活費を出して貰っていたのに大学では人文系の学科へ進学し、そのことを養家に伝えたことに発端があった。先生は K の置かれた状況を「昔の言葉で云へば、まあ勘当なのでせう。或はそれ程強いものでなかつたかも知れませんが、当人はさう解釈してゐました。」(75章/下21)と説明する。この箇所は、To use an outmoded expression, they, as it were, disowned him. Perhaps it was not quite so radical as that, but that was how he understood it. (163)と翻訳されており、disown という動詞が「勘当する」という日本語に対応している。原文には「昔の言葉で云へば」とある。もっとも、現代の日本人でもこの言葉の意味は知っている。けれども、「勘当」という言葉が持つ概念を先生は古いものとして認識している。果たして、disown という単語にそこまでの古めかしい匂いが感じ取れるのであろうか。outmoded は old-fashioned と同義で、up-to-date の対義語となる。意味としては、＜流行遅れの＞、＜今では役に立たない＞、＜すたれた＞といったような日本語が相応しいように思われる。勿論、「勘当」という言葉は古めかしくなくとも、そのような行為に親が出たとしたら、そのような扱い方こそが時代がかっていると解釈することもできる。

この小説の舞台は東京である。東京在住の読者ならば、土地勘があり、地名などを見れば、その風景が浮かんでくるという場合があつて当然である。しかしながら、東京以外に住む読者、まして海外在住の読者にとって地名は単なる記号に過ぎない。漱石は東京の風景をしばしば描いているが、『心』においても「私は食後 K を散歩に連れ出しました。二人は伝通院の裏手から植物園の通りをぐるりと廻つて又富坂の下へ出ました。」(81章/下27)というような描き方をしている。この箇所の英訳は、After dinner K and I went for a walk. We went behind Denzûin Temple and around the botanical gardens, emerging

below Tomizaka.(174)とそのまま訳されており、取り立てて問題にすべきところではないかもしれない。けれども、「伝通院」、「植物園」、「富坂」という地名を単なる記号としてしか理解できない読者と、東京在住の読者とでは読み方が異なってくるかもしれないということを指摘したい。換言すれば、散歩に誘った先生の気持ちの揺れがこのような散漫な歩き方となって現われているという解釈を立てる土地勘の鋭い読者がいるのではないということなのである。

K と先生との間では「大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と抱負と修養の話位で持ち切つてゐたのです。」(83章/下29)とあり、その原文には For the most part, our conversations were confined to the subject of books and study, our future work, our aspirations, and self-improvement. (178)が対応している。「書物」が books、「学問」が study、「未来の事業」が our future work、「抱負」が our aspirations、「修養の話」が self-improvement なのである。

K は尊敬する偉人の話を持ち出すが、「K の口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりした所謂難行苦行の人を指すのです。」(85章/下31)には When K spoke of “the ancients,” of course, he was not referring to men of legendary daring and courage. His heroes were the fierce ascetics of old, those mortifiers of the flesh who lashed themselves for the sake of spiritual attainment. (182)という英文が対応している。難行苦行の人とは、K 自身のイメージであって、他者には説明を必要とする概念であると先生は考えた。だからこそ、霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりした、という解説が添えられている。けれども、先生の語りは大正初期という時代の雰囲気に基づく文体から自由にはなり得ず、現代的感覚から見れば英訳者が試みたように咀嚼を必要とするものとなっている。

11 月の寒い雨の降る日に先生は往来で K と連れだってやってきた御嬢さんを見て嫉妬の念に駆られていることを自覚した。その時のことを先生は「御嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶をしました。其時分の束髪は今と違つて廂が出てゐないのです、さうして頭の真中に蛇のやうにぐる／＼巻きつけてあつたものです。」(87章/下33)と振り返るが、この遺書が執筆された時間である大正3年と先生や御嬢さんが若かった頃との間には10年以上の時間の経過が存在する。明治中頃であれ、大正3年であれ、当時の日本人女性の髪形を想像するのは、現代の読者にとっては容易ではない。ましてや、海外の読者にとっては尚更のことである。英訳を見てみよう。She greeted me, her cheeks slightly flushed. In those days, fashionable girls wore their hair swept straight back from the forehead and coiled on top of the head.(187)となっているのだが、再翻訳するならば、<彼女は頬をわずかに赤くして私に挨拶しました。その頃、時代の最先端に行く女性は髪を額から後ろへ真っ直ぐに束ね、頭の上で巻きつけていました。>とでも表現し得よう。この箇所も、文字通りに翻訳されているのは間違いないが、それで御嬢さんの髪形を知ることができるかどうかということになると、明治時代の女性の間で流行したファッ

ヨンに関する根本的な知識が必要となってくる箇所なのである。

4.9. K の告白

K が御嬢さんに心を奪われたと先生に告白した瞬間の心理状態を先生は、「其時の私は恐ろしさの塊りと云ひませうか、又は苦しさの塊りと云ひませうか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のやうに頭から足の先までが急に固くなつたのです。呼吸をする弾力性さへ失はれた位に堅くなつたのです。」(90 章 / 下 36) と回想しているが、この部分の英訳は、My whole being was reduced to a single concentrated point——of terror, of pain. I stiffened instantaneously from head to foot, like stone or steel. So rigid was I that I almost lost the power of breath. (192) となっている。注意しておくべきなのは、原文には「塊り」という単語が 3 回、「固く」と「堅く」がそれぞれ 1 回登場していることである。原文では強迫的なまでに「塊」や「堅さ」が強調されるが、英語の文脈においては、この「塊」が point と訳され、「恐ろしさ」や「苦しさ」は後ろから修飾される形で処理されており、同じ単語の反復は慎重に避けられている。ここも、英訳に接する英米圏の読者の方が、文意を率直に解しやすいかもしれないのである。

その後、結局、先生は K がぐずぐずしているうちに、彼を出し抜く形で奥さんに御嬢さんと結婚したい旨を告げ、了承を得る。しかしながら、その事実が K に暴露されてしまうと、先生の面子が丸つぶれとなってしまう。奥さんはややもすると、そのような行動に出かねなかったので、先生は「結婚する前から恋人の信用を失ふのは、たとひ一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のやうに見えました。」(101 章 / 下 47) I could not bear the thought of losing so much as a particle of my beloved's belief in me before we had even married. (214) と心配する様子を隠せないでいる。「たとひ一分一厘」には a particle < 極少量、微塵 > が対応しており、原文が醸し出す雰囲気を読者にうまく伝え得ていると見られる。

4.10. K の死

ところが、K は自殺してしまった。その前夜、「何時も東枕で寝る私が、其晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。」(102 章 / 下 48) 英訳だと I usually slept with my head facing east, but for some reason——fate, perhaps——that evening I had laid out my bedding to face the opposite direction. 1 (102 章 / 下 48) とあって、「東枕」、「西枕」には注釈が付されているが、これはやむを得ない措置であろう。

K の自殺を知った先生は、当時を振り返って、「私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、恰も硝子で作つた義眼のやうに、動く能力を失ひました。」(102 章 / 下 48) と述べている。対する英訳では、I took in the room with a single sweeping glance, and then my gaze froze——my eyeballs started in their sockets as if made of glass. (217) と K の突っ伏している姿に接した際の第一印象を訳している。「恰も硝子で作つた義眼のやうに、動く能力を失

ひました。」という箇所には *then my gaze froze—my eyeballs started in their sockets as if made of glass* という英語が対応している。sockets とはもともとは電気のソケットのことである。eyeball は<眼球>、froze は freeze の過去形で、<凍った>というのが第一義であるが、興奮・恐怖などで<ぞっとする>という意味にも発展する。けれども「義眼」という名詞はそのまま対応する単語を英語に見い出すことが難しく<ガラスで作った>という風に説明調で翻訳されている。

事態をようやく飲み込んだ先生は、「もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横はる全生涯を物凄く照らしました。(102章/下48) った絶望的気分を味わうのであった。対する英訳はどうか。

The knowledge that this was irredeemable shot its black blaze through my future and for an instant lit with terrifying clarity all the life that lay before me. (217)

knowledge とは、観察・経験などから得たかなりまとまった情報で、真理・事実として確立したものを指している言葉であるが、この主語に対応する動詞は *shot* <shoot の過去/ 撃つ>と *lit* <light の過去/ 照らす>であり、and で等位接続されている。原文では「黒い光が照らした」となっているが、訳文では<知見が照らした>として処理されている。

先生はその後、奥さんから命じられるがままに、医者や警察を回り、所定の手続きを済ませて帰宅する。その時の様子は、「私が帰った時は、Kの枕元にもう線香が立てられてゐました。室へ這入るとすぐ仏臭い烟で鼻を撲たれた私は、其烟の中に坐つてゐる女二人を認めました。(104章/下50)と先生は振り返るが、対応する英訳は *When I returned, incense was burning beside the pillow. As I entered the room, that funereal scent assailed my nose, and I discovered mother and daughter sitting there wreathed in its smoke. (220)* という箇所である。「線香がたてられてゐました」という箇所には、*incense was burning* という英訳が対応している。これを再翻訳すると、<線香が焚かれていた>となるであろう。確かに線香は燃えた状態で立てられていたはずであるので、1つの解釈がなされていると見ることができよう。この状況、日本人読者であれば、線香の火が消えたまま立てられているとはまず想像しないはずであるが、英米圏で死者の弔い方が異なる地域の読者を相手に配慮を示した翻訳者の様子をうかがい知ることができるのである。英米圏では、例えば、キャンドルを灯す習慣が上記の日本風に対応すると思われる。

その直後には、「奥さんは私にも線香を上げてやれと云ひます。私は線香を上げて又黙つて坐つてゐました。(104章/下50)という表現が見えるが、その英訳は *Okusan urged me to offer incense before the corpse. I did so, then returned to sit quietly again. (221)* であつて、再翻訳するならば<奥さんは私に亡骸の前に線香をあげるように促し、私はそのようにした>という日本語になる。日本語には<線香をあげる>という発想が染みついているが、英語圏ではそうではないことがよくうかがえる箇所である。

先生は、Kの親族に雑司ヶ谷の墓地への埋葬許可を得る。このことにまつわる話を原

文と訳文とを並べて以下に示してみよう。

私も今其約束通り K を雑司ヶ谷へ葬つたところで、何の位の功德になるものかとは思ひました。けれども私は私の生きてゐる限り、K の墓の前に跪まづいて月々私の懺悔を新たにしたかつたのです。(104 章 / 下 50)

I did ask myself what good it would do me to fulfill this pledge to him now. But I wanted him buried close by, for I was determined to return to his grave every month for the rest of my life and kneel before it in renewed penitence and shame. (221)

「私の生きてゐる限り」には every month for the rest of my life < 私の残りの人生の間毎月 月命日に > が当てられている。「懺悔」に相当している英語は penitence and shame であるが、penitence のみでも < 懺悔 > という意味を表し得よう。しかしながら、shame < 不名誉 > という単語が添えられることで、一層強い先生の自責の念が表現されるようになっている。

先生はその証拠に石屋に行って、K の墓石を見立てて、墓の建立を引き受ける。静はその墓を立派だと言ったのだが、その肯定的な評価を先生は受け入れられない。上記と同様に原文と訳文を並べてみると、以下のようになる。

其墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行つて見立てたりした因縁があるので、妻はとくに左右云ひたかつたのでせう。私は其新らしい墓と、新らしい私の妻と、それから地面の下に埋められた K の新らしい白骨とを思ひ比べて、運命の冷罵を感じずにはゐられなかつたのです。(105 章 / 下 51)

It was not particularly impressive, but she probably felt the need to praise it because I had personally gone to the stonemason and chosen it. Privately, I balanced in my mind the images of this new grave, my new wife, and K's new white bones lying buried at my feet, and a sense of the cold mockery of fate crept over me. (223)

ここは原文、訳文共に 2 文からなっているが、まずは第 1 文目に着目してみよう。英文を再翻訳するならば、「墓は取り立てて印象深いという訳ではなかったが、先生が個人的に石屋に行って墓石を選んできたので静は恐らく墓を褒める必要を感じた。」とでも訳せば、原文との相違を明確にできよう。原文の「見立てたりした因縁」というニュアンスが訳文では平易化されていることに気付かされる。「見立て」とは < 選ぶ > という行為に近く、「因縁」は < 関係 > という概念で言い表されそうであるが、これは 1 対 1 対応させて翻訳すると破綻を来たす場面である。よって、上記のような翻訳に落ち着いたものと考えられる。一方、第 2 文目は「新しい」が 3 度登場し、たたみかけるような筆致となっているが、英文でもそのまま new が 3 度用いられ、原文の雰囲気をも忠実に伝えようとする翻訳者の姿勢が伝わってくる。

4.11. 脅かされる精神

「運命の冷罵」に脅かされる先生の精神状態は安定とは程遠いと言わざるを得ない。

先生はその後、性格に暗い影を来たすようになり、妻からの詰問を受けるが、「私はたゞ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに一雫の印気でも容赦なく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だつたのだと解釈して下さい。」(106章/下52)と「私」に対して語りかけるようにして、当時の心境を反芻する。対する英訳は、No, I failed to confess for the simple reason that I could not bring myself to contaminate her memory of the past with the tiniest hint of darkness. It was agony for me to contemplate this pure creature sullied in any way, you understand. (225)となっているのだが、contaminate her memory は<記憶を汚す>であって、<一雫の印気でも容赦なく振り掛ける>という強い比喩表現はいささか影を潜めた。

先生は、湧き上がる恐怖心に耐えかねて、酒に溺れようとしたこともあった。当時を回想して先生は言う。

私は酒が好きだとは云ひません。けれども飲めば飲める質でしたから、たゞ量を頼みに心を盛り潰さうと力めたのです。此浅薄な方便はしばらくするうちに私を猶厭世的にしました。私は爛酔の真最中に不図自分の位置に気が付くのです。自分はわざと斯んな真似をして己れを偽つてゐる愚物だといふ事に気が付くのです。(107章/下53)
この箇所の英訳は、以下の通りである。

I cannot say I like alcohol, but I am someone who can drink if I choose to, and I set about obliterating my heart by drinking all I could. This was a puerile way out, of course, and it very quickly led to an even greater despair with the world. In the midst of a drunken stupor, I would come to my senses and realize what an idiot I was to try to fool myself like this. (226)

この英文だと「量を頼みに心を盛り潰そうと努めた」という箇所が、<私は飲めるだけ飲んで心を消し去ることに取りかかった>というように訳されている。また、「爛酔の真最中に」は、<世間に対してのいや増す絶望感>といった意味に変換されている。

その後、先生は「私の胸には其時分から時々恐ろしい影が閃めきました。」(108章/下54)と振り返るが、その箇所に対応する英訳は、From around this time, a horrible darkness would occasionally grip me. (229)となっており、<この頃から、恐ろしい影が時々私を締め付けました>、または<とらえて離さないようにしました>というような形でまとめられている。表現したい内容は、<閃めきました>と同様であるが、微妙な意味の差異を認めることができる。

また、「私はたゞ人間の罪といふものを深く感じたのです。其感じが私を K の墓へ毎月行かせます。其感じが私に妻の母の看護をさせます。さうして其感じが妻に優しくして遣れと私に命じます。私は其感じのために、知らない路傍の人から鞭うたれたいと迄思つた事もあります。」(108章/下54)という箇所では、「感じ」という語が5度も繰り返され、強迫的に追い詰められた先生の様子が文体上でも確認できる仕組みになっているが、英訳ではその煩雑さを避けるべく、feeling という語は以下のように1度しか表われない。

What this feeling produced was, quite simply, a keen awareness of the nature of human sin.

That is what sent me back each month to K's grave. It is also what lay behind the nursing of my dying mother-in-law, and what bade me treat my wife so tenderly. There were even times when I longed for some stranger to come along and flog me as I deserved. (229)

これは、英語が同じ単語の繰り返しを嫌う言語であるからと考えられる。けれども、そのような傾向は日本語にも存在しはしまいか。これは漱石独特の表現技法と考えた方がよいと思われる。何か心の中を取り巻く絶望的な気分が書き手の先生を支配しており、それが「感じ」の反復となって読者に伝わり、先生の悔恨を強化して訴えかけるという手段が原文における漱石の判断であると理解できる。

4.12. 明治の終焉

その後、話題は変化し、「すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。」(109章/下55)という文が現われる。英訳は And then, at the height of the summer, Emperor Meiji passed away. (231)だが、明治天皇の死とそれが社会にもたらした影響についてマッキニーは序文で解説を加えている。passed away は<亡くなった>という意味でしかないが、明治天皇の死が当時の人々にとって精神的支柱を失うが如き重大事だった事実は、同時代を生きた日本人にしか感覚的には理解できない。明治時代を生きた先生は、以下のようなやり取りを妻との間で交わしている。

其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでした。何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯ひました。(109章/下55)

この箇所、英訳を参照してみよう。

I felt then that as the spirit of the Meiji era had begun with him, so it had ended with his death. I was struck with an overwhelming sense that my generation, we who had felt Meiji's influence most deeply, were doomed to linger on simply as anachronisms as long as we remained alive. When I said this in so many words to my wife, she laughed it off. But then for some reason she added teasingly, "Well, then, you could follow the old style and die with your lord, couldn't you." (231)

ここで興味深いのは、「私は明白さまに妻にさう云ひました」という箇所が I said this in so many words to my wife, となっていることである。先生は確信を持って妻に話したというのが原文の意味合いであるが、英訳では<多くの言葉を使ってこのことを妻に言った>と書き換えられている。「殉死」は確かに翻訳困難な概念であるが、die with your lord <君主と共に死ぬ>というような形でまとめられている。1対1で対応する単語は英語には存在しない。

妻から殉死という言葉が聞かされた先生は、「私は殉死といふ言葉を殆んど忘れてゐま

した。平生使ふ必要のない字だから、記憶の底に沈んだ儘、腐れかけてゐたものと見えます。(110 章 / 下 56)と述べるが、この箇所は I had almost forgotten the expression “to die with your lord.” It’s not a phrase that is used in normal life these days. (233)

となっており、興味深い。日本語では「殉死」は < 字 > なのだが、英語では、die with your lord というわけだから、飽くまで < 語句 > (= a phrase) なのである。

明治天皇の死は先生にある時代の終焉を強く意識させた。

それから約一ヶ月程経ちました。御大葬の夜私は何時もの通り書斎に坐つて、相図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知の如く聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去つた報知にもなつてゐたのです。私は号外を手にして、思はず妻に殉死だ / \ と云ひました。(110 章 / 下 56)

この箇所に相当する英訳は次のようなものである。

About a month passed. On the night of the cremation, I sat as usual in my study. As the imperial coffin emerged from the palace, I heard the boom of the funeral cannon. To me it sounded the Meiji era’s end. Later I read in the newspaper that it also signaled the end of General Nogi. When my eyes fell on this news, I seized the paper and waved it at my wife. “He died with his lord!” I found myself exclaiming. (232)

なお、General Nogi については序文に解説もあるのだが、上述の部分の参考までに再翻訳してみると、原文との違いが明瞭となる。 < 一ヶ月程が経ちました。(明治天皇が) 埋葬される夜、私はいつも通り書斎に腰を下ろしてしていました。天皇の棺が皇居から現れた時、私は葬儀の大砲がとどろく音を聞きました。私にとってはそれが明治時代の終焉のように聞こえました。後に私はそれが乃木大将の死を知らせるものでもあったということを新聞で読みました。私は新聞を掴み、妻に向つて振りかざしました。『乃木大将が殉死した』と私は気づいたら叫んでいました。 > 文字通りの逐語訳を試みたが、「永久に去つた報知」は英訳では明治天皇に対しても、乃木大将に対しても end というより他にない。けれども、原文の持つ意味は相当重い。

先生は乃木大将の後追いをするように死の決意へと傾いていく。「私が死なうと決心してから、もう十日以上になりますが、その大部分は貴方に此長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。(110 章 / 下 56)と述べられた箇所は、It is now ten days since I decided to die. You should know that I have spent most of that time writing this long memoir to leave for you. (233)となっている。再翻訳するならば、 < 私が死を決意して今で 10 日になります。その時間の大半をあなたに書き残しておくべきこの長い自叙伝を書くのに使ったということをぜひあなたは知っていてください。 > となる。英訳では leave for you とある箇所が < あなたのために残す > という意味になっている。

4.13. 遺書の完結

先生は「私は酔興に書くものではありません。」(110 章 / 下 56) と述べるが、その箇所

は、I have not written from mere personal whim.(233)となっている。whim は思いつき、出来心、気まぐれなどと一般的には訳される。一方、「酔興」とは漱石による当て字で、通常は<粹狂>という漢字を使用するのが適当な場面である。<粹狂>と言えば、物好きなこと、好奇心が旺盛なことという意味が含有されているとみてよい。とすれば、原文は、「物好きなように思われても仕方がないが、私はそうではありません。」という意味まで読み取ってもよい。単なる物好きや好奇心による遺書執筆だったのか、それとも冷徹な自己分析あつての遺書なのか。いや、冷静な眼差しなくして 56 章にも及ぶ文章を書き継ぐことはできまい。

5. 結語

こうしてみると、翻訳者の苦心の跡が様々にうかがえると言える。本稿で触れ得た問題はマッキニー訳のごく一部に過ぎなかったものの、このような議論を各文に対して精緻に行っていけば、膨大な記述に発展することは間違いない。また、日本人である近藤いね子の訳、アメリカ人であるエドウィン・マックレランによる訳との比較をすれば、イギリス英語を主体とするオーストラリア人のメレディス・マッキニー訳に独特の傾向を指摘できるかもしれない。

この作品の翻訳は英語圏のみならず、世界各国で進められている。ヨーロッパ諸語では英訳に観察される問題と同様の傾向が観察されるかどうか、また、文化が比較的近似したアジア諸語訳ではそれらの問題が解決されているかどうか、いや逆に似ているからこそ誤解を生じやすい例も存在するのではないか、など複数の翻訳に接すれば、議論は如何ようにでも発展させられるに違いない。

夏目漱石『心』の翻訳、ここではその中でもメレディス・マッキニー訳に絞って論述したが、この翻訳を 1 つの窓として、異文化に触れること、その差異に気づくことこそが、究極の研究目標であることを繰り返し明言し、結びとしたい。

付記

本文の引用は、日本語原文については『漱石全集 第 9 巻』(岩波書店 1994 年 9 月)、英訳については Natsume Sôseki, *Kokoro* translated by Meredith McKinney, New York, Penguin Classics, 2010. によった。なお、英訳引用末尾に伏した番号は同書からの引用頁数を指し示している。

参考文献一覧

Natsume Sôseki, *Kokoro* translated by Ineko Sato. Tokyo: The Hokuseido Press, 1941.

Natsume Sôseki, *Kokoro* translated by Edwin McClellan. Chicago: Henry Regnery Company, 1957. London:

Peter Owen, 1967. Rutland: Tulltle, 1969. London: Arena, 1984, New York: Dover Publications, 2006.

Natsume Sôseki, *Kokoro* translated by Meredith McKinney. New York: Penguin Group, 2010.

Natsume Sôseki, *Kusamakura* translated by Meredith McKinney. New York: Penguin Group, 2008.

McClellan, Edwin. "On Translating Kokoro." *A Symposium on Natsume Sôseki's Kokoro: A Selection from the Proceedings*, Ed. Lien-hsiang Lin. Singapore: Department of Japanese Studies, National University of Singapore, 1994.

エドウィン・マクレラン、山中由里子訳『『こゝろ』の翻訳について』、平川祐弘・鶴田欣也訳『漱石の『こゝろ』—どう読むか、どう読まれてきたか—』新曜社 1992年11月

秋山勇造「『心』の英訳について」、『人文研究』第115号 神奈川大学人文学会 1993年3月

秋山勇造「『心』の英訳—近藤訳とマクレラン訳—」、『秋山勇造『翻訳の地平—翻訳者としての明治の作家—』翰林書房 1995年11月

井本美紗緒「日本文学英訳における日英語の比較 —Edwin McClellan による夏目漱石作『こころ』の英訳について—」、『福岡女子短大紀要』第5号 福岡女子短期大学 1972年3月

大澤吉博「夏目漱石『心』における非日常性—その構造と文体—」、『比較文学研究』第80号 東大比較文学会 2002年9月

岡田章子「『こころ』の英訳をめぐる—McClellan 訳と近藤いね子訳の比較—」、『桃山学院大学総合研究所報』第4巻第1号 桃山学院大学総合研究所 1978年6月

川崎謙・鳥井美和・浜部武生・福見克敏「理科教育の鍵概念『自然』に関する資料—漱石『道草』『こゝろ』に見る自然—」、『岡山大学教育学部研究集録』第90号 岡山大学教育学部 1992年3月

近安里「夏目漱石『こころ』考—E・マクレランの英訳をめぐる—」、『明治大学日本文学』第23号 明治大学日本文学研究会 1995年6月

近安里「『心』のロケーションに関する一考察—夏目漱石の『こころ』から—」、『明治大学日本文学』第24号 明治大学日本文学研究会 1996年6月

斉藤恵子「二つの KOKORO—マクレラン訳と近藤いね子訳—」、『比較文学研究』第57号 東大比較文学会 1990年6月

高島敦子「夏目漱石と現代人の問題—英文『こころ』研究—」、『青山学院女子短期大学紀要』第27号 青山学院女子短期大学 1973年11月

徳永光展『夏目漱石『心』論』風間書房 2008年3月

徳永光展、小河賢治「英文・夏目漱石『心』の研究—Meredith McKinney 訳の評価をめぐる—」、『社会環境学』第2巻第1号 社会環境学会 2013年3月

徳永光展「夏目漱石『心』英訳の状況—Meredith McKinney の翻訳をめぐる—」、『第2回アジア未来会議予稿集 USB』渥美国際交流財団 2014年8月

徳永光展「日英翻訳における時制の処理—夏目漱石『心』の Meredith McKinney による英訳を例として—」、『タイ国日本研究国際シンポジウム 2014 論文報告書』チュラーロンコーン大学文学部東洋言語文化学科日本語講座 2015年3月

徳永光展「夏目漱石『心』英訳で読む『中 両親と私』—Meredith McKinney 訳の分析—」、『高雄大學東亞語文學系第四屆東亞語文社會國際研討會：日本研究的去疆界化與再疆界化 會議手冊』、高雄大學人文社會科學院東亞語文學系 2015年4月

徳永光展「夏目漱石『心』英訳にみる日本文化翻訳上の問題点—Meredith McKinney 訳を手がかりに—」

The electronic proceedings of the 4th International Conference of the Japanese Studies Association in

**夏目漱石『心』英訳で読む「下 先生と遺書」
—Meredith McKinney 訳の分析—**

徳永光展

Southeast Asia "State and Non-state Actors in Japan-ASEAN Relations and Beyond" edited by the
Institute of East Asian Studies, Thammasat University. (November 2015)

徳永光展「夏目漱石『心』英訳で読む「上 先生と私」—Meredith McKinney 訳の分析—」、李東哲主
編『中朝韓日文化比較研究叢書 日本語文化研究 第4輯』延辺大学出版社 2016年（発刊予
定）

夏目漱石『漱石自筆原稿 心』岩波書店 1993年12月

夏目漱石『漱石全集第9巻』岩波書店 1994年9月

北條文緒『翻訳と異文化—原作との ずれ が語るもの—』みすず書房 2004年3月

前田尚作『日英語学研究—漱石著『こゝろ』の英訳に学ぶ—』山口書店 1996年3月

丸山和雄「日英比較表現研究—こころ・Kokoro (PART)—」、「立正大学短期大学部紀要」第25
号 立正大学短期大学部 1989年9月

丸山和雄「日英比較表現研究—夏目漱石「こころ」の言語分析研究 (PART)—」、「立正大学短期大
学部紀要」第26号 立正大学短期大学部 1990年3月

丸山和雄「日英比較表現研究—夏目漱石「こころ」の言語分析研究 (PART)—」、「立正大学短期大
学部紀要」第28号 立正大学短期大学部 1991年6月

執筆者紹介

氏名：徳永光展

所属：福岡工業大学社会環境学部

E-mail：tokunaga@fit.ac.jp